第 12 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会

日時：令和５年６月 19 日（月）
18 時～19 時 30 分
会場：ニシザワいなっせホール

次 第

１ 開　会

２ 挨　拶

３ 会議事項

（１）第 11 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ 【資料１・２】

（２）第５回校地検討会議の報告

（３）「上伊那総合技術新校（仮称）再編実施計画懇話会」のスケジュール
【　資料３　】

（４）学校像のイメージ（案）について 【資料４～10】

（５）意見交換

４ その他

次回（第 13 回）の予定　未定

【日時】　未定

【会場】　未定

【内容】　再編実施基本計画に向けた懇話会でのまとめについて

５ 閉　会

資料１

第 11 回　上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ（案）

日時・会場	令和５年（2023 年）５月 30 日　18 時 00 分～19 時 30 分　長野県伊那合同庁舎講堂
出欠席	懇話会構成員：出席者 30 名、欠席者４名（山田勝己、唐澤直樹、向山賢悟、有賀泰司） 事務局：県教委３名（中島主幹指導主事、田中主任指導主事、宮崎主事） 辰野高校３名、箕輪進修高校２名、上伊那農業高校４名、駒ヶ根工業高校３名
傍聴者	傍聴７名（オンラインを含む）、報道５社
会議事項	（１）第１０回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ （２）上伊那農業高校内 伊那養護学校高等部 中の原分教室の実践 （３）学校像のイメージ（素々案）について　　（４）意見交換
当日資料	第 11 回懇話会（資料）、伊那養護学校からの資料、意見交換ワークシート

主な内容（意見及び発言等）

（会議の概要）

（１）第 10 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会まとめ

前回懇話会での意見交換の主な意見・発言の確認。グループ討議で出された意見の確認。

（２）伊那養護学校高等部 中の原分教室の実践（原校長先生より報告）

昨年度 10 周年を迎えた中の原分教室の実践を報告。

（３）学校像のイメージ（素々案）について（事務局より説明）

学校像のイメージのたたき台に対するご意見、これまで懇話会で出された意見を踏まえた学校像のイメージ（素々案：事務局作成）を説明。

（４）意見交換

グループごと事務局から説明された学校像のイメージの素々案について意見交換。事務局員が進行し、全体で発表。

（意見交換の概要）

・言葉遣いや、科名は若干考えたほうが良い。
・専門性を持った学校が一つになるというということだがベースになる専門性は確保してほしい。
・生徒がデザインできる、具体的に具現化できる学校につなげてほしい。
・キャッチフレーズを作るのは難しいのではないか。
・今やっている校外での活動など財産として次の学校に残してほしい。クラブ活動、生徒会活動などもイメージに取り込んでほしい。
・概ねイメージはしっかりまとめられているが、学科コースの例は中学生が見たときにイメージが湧きにくい。
・農業、工業、商業の３つの軸をしっかりとした上で、見える形に整理してほしい。
・育てる生徒像の「上伊那～」、目指す学校像の「学科の枠を超えた～」というメインとなる部分を上にしてはどうか。
・連携は大切にするが、専門性が薄れないようにしていくことが必要ではないか。
・伊那谷アグリイノベーション推進機構とも連携が取れればよいのではないか。
・「地域」で学んでいくことで、モチベーションも上がり、人とのかかわりも学べているというのがよい。
・専門性の追求はもちろんあるが、多種多様な生徒を受け入れられる学校を実現してほしい。
・社会の構成から見ても様々な人がいるのでミックスホームルームで様々な専門を学んでいる生徒がいる。
・工業×商業×農業とあるがどうして工業は一つなのか。3 つの良さを保ちながら掛け合わせるのが新校ではないか。
・ミックスホームルームは、生徒が刺激しあってよいのではないか。
・すべてをミックスにするのが新校の良さではないか。その中でミックスホームルームはとても良いのではないか。
・イメージは、中学生向けというよりは大人向けになっている。
・いろいろなことをやらされるのではなく、自ら選び探究することで社会に貢献できるのではないか。
・農業、工業、商業の良さを保ちながら融合しあえることも考えていただきたい。
・15 歳の中学生が熱意を持って農業、工業、商業の枠にこだわって選択ができるのか。

今後の検討事項

◎事務局から学校像のイメージの原案を提案する。提案された原案を基にイメージを固めていきたい。

その他

【次回】　日時：令和５年（2023 年）６月 19 日（月）　18：00～19：30

場所：ニシザワいなっせホール　（伊那市生涯学習センター６階）

内容：新校の学びのイメージについての意見交換

資料２

第 11 回上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会（R５．５.30）グループ討議記録
（意見交換シート記述も含む）

○学びのイメージ（素々案）について

グループで出た意見	
A	○工業と商業や工業と農業の学びは一緒にならないのか。農業でも工業や商業の面の学びが必要。農＋商＋工のような内容もあるのではないか。 ○意欲力という言葉は聞いたことがない。意欲とどう違うのか。 ○地域デザイン科は専門科の必修単位 25 を考えると農業が中心になり、商業の学びはどうなるのか。赤穂高校が総合学科高校になることを考えると、上伊那の商業教育はどうなるのか。 ○農工商の３学科が融合した新学科はどうなったのか。 ○ここに書いてあることは果たして高校３年間でできるのか。 ○やらされている感が強い。 ○中学生でこの内容を考えて、選択する生徒がどれくらいいるのか。 ○イメージ像が大人向けでは。内容を詰め込みすぎているのではないか。言葉が難しい。 ○地域にこだわりすぎでは。世界に出て行きたい生徒もいるのでは。 ○グローバルの視点がほしい。 ○常に何をしようとしているのか。そのしようとしていることをどのように具現していこうとするのか。例えば、コーディネーターに当たる方を学校で配置することはどうか。構想に入っているということでいいのか。 ○融合というのはちょっと頑張りすぎているのではないか。 ○意欲のある生徒にとってはとてもおもしろいのではないか。そういう生徒がすべてではないが。 ○地域企業の人材育成に重点を置きつつ、世界的な視野を持つ人材育成も大切。 ○イメージ像をもっとシンプルに。コース例が多い。わかりやすい形に。 ○イメージを提示する際に規模（学級数 or 人数）、メインとなる教育課程、専門科目 25 単位が何であるのかというのは必要か。 ○実習が多くなる学科であるからこそ１クラス２０～３０人で考えていきたい。 ○育つ力「チーム開発に積極的に取り組むことができるコミュニケーション能力」については、コミュニケーション能力のイメージが狭いのでは。例えば、多様な人々とのコミュニケーション力といった要素などもイメージできるような表現の検討がなされることも大切ではないか。 ○強い意志がない人は学べるのか。 ○高校生をもっと会議に参加させるのがよい。 ○ミックスホームルームにして新たな発見をする。 ○外（世界）へ向けてみられる環境と学習ができるシステムの構築を望む。
B	○学科名称分かりづらい。工業・農業・商業と言った方が何を学ぶのかはっきりする。デザインというと服飾デザインのデザインをイメージする。 ○「学びを通して」と表現しているのは良い。 ○“プラットフォーム”というのは、すべての基本・ベースという意味でありイメージが異なる。さらに土木・建築・繊維など入れるのは違う。「専門性を深め、幅を広げる」というのがプラットフォームと言えるか疑問だ。 ○学びを支えるシステムの充実が必要。 ○共創プラットフォームは重要。特に、国際機関としては駒ヶ根に JICA があり、地元にあるものを取り入れていて良い。 ○資格を頑張って、それを活かして就職するという部分で、いままでの良い点は継続できるのか。 ○色々盛り込まれていて、今までの良いところが続けられるのか心配。 ○「つながる」要素が色々なところにあるのが良い。これが当たり前になっていくと良い。身近に色んな人が住んでいて、色んな仕事があると分かる。色んな技術を身に付けたと、自信を持って卒業出来ると良い。 ○ミックスで、隣の生徒が何をやっているのか、何を勉強しているのか分かるのが良い。 ○デザインは企画する、計画する、などの意味。汎用的に使われるもので、これからの上伊那の将来を見通している。 ○様々な個性を持った生徒が様々な場面で活躍し、個性や自分の長所を伸ばせる、そんな学校になりそうで良い。 ○地域や社会に貢献できる学校にするために、学校で何を学んで、何に貢献するのか。私たちにとって学校は授業だけではない。学ぶだけでなく、クラブや生徒会活動も大切。それらが入ってこ

	そ充実した学校生活だ。 ○「地域・社会に貢献」というのと「個人や社会のしあわせを実現」というキーワードが、何度も話し合いをしてきて決めてきた内容ではあるが、同じキーワードに感じる。 ○４校のこれまでやってきた学びのイメージは参考にしないのか。辰野高校では購買などやってきた。学びとして楽しく充実している。専門性を持った学校が一緒になるのだから、それぞれがやってきた良いものは続けてほしい。 ○キャッチフレーズが難しい。新校は「農業・工業・商業」を学ぶ学校」というイメージではなく、「農業、工業、商業を通していきいきと生活して個人や社会のウェルビーインを実現できる学校です」というイメージが持てるキャッチフレーズやイメージ作りができると良い。 ○専門性が感じられない。一緒くたにして新しい学校という意識が感じられ危惧する。現状の教育レベルを落としてはほしくない。 ○学生にとってはミックスも必要で、入学時に「工業を学びたい」という生徒もいれば、「何をやりたいか分からない…」という生徒もいる。学んでいる間に「工業をやりたい」と考えるようになる生徒もいれば、3 年間でやりたいことを見つけて卒業してから進学や就職で工業を選ぶ生徒もいる。それらも「多様な生徒」ではないか。 ○連携は専門的な知識が身に付いてから行うものではないか。 ○25 単位確保できるのか、案を具現化出来るのか。25 単位を広げられるのか、そのくらいしても具現化する覚悟が必要。 ○地域デザインという名称はいい。上伊那の農業は衰退しており、これからどうしてよいか分からないという意見もある。その中で、例えば国際的に上伊那の農業を輸出していくにはどうしたらよいかなど考えていかなければならない。地域の未来をデザインしていくことが求められる。商業的にこれからの上伊那をデザインしていくことも重要。 ○「専門性」と、ちゃんと書き込むべき。具体的な学びの中で、どう専門性を担保するのか。 ○今やっていることの良さを財産として残るようにしてほしい。 ○専門性は必ずしも高校内の学習だけで終了するものではないと考える。きっかけを学ぶ学校でもある。 ○育てる生徒像、目指す学校像に関しては良い。「育つ力」に関しては更に考える必要もある。
C	○今までの懇話会の内容がよくまとめられている。方向性はいいと思う。 ○全体的にはよいと思うが、全てはできないのではないか。（あれもこれもと多すぎる） ○薄く広くではなく、方向性を絞るべき。軸足が見えてこない。 ○農工商の融合が見えてこない。 ○工×商×農の学びを一人がすべてやるイメージをもつと専門性が失われるので、３つの科が連携・融合することで、各々の課題を解決するような学校（学科）のイメージを目指したい。 ○イメージ図の真ん中辺りの矢印は、下向きの方がよいのではないか。 ○育てる生徒像の４つ目「上伊那で学び、地域・社会を・・・」を一番上に表記したらどうか。 ○目指す学校像の２つ目「上伊那の資源を・・・」、３つ目「学科の枠を超えた」を上にもってきたらどうか。 ○専門性の担保は必要（大前提）、大切にしたい。＜専門・連携・協働・融合＞ ○専門性と融合（化学反応）を魅力へ。 ○専門性と融合はある意味相反するものであるから、両方しっかりやるのは難しいのでは。 ○商業のスタンスが見えづらい。 ○他科の科目選択は魅力。 ○学科名称は難しいと思うが再考してほしい。 ○社会を創る技術のために、お金の動きを学ばせてほしい。 ○子どもでもわかるような表記にできると、理解が進み、目を引くことが可能になる。 ○学科のコースをもう少し厳選すべき。コースの内容が多い。例えば「野菜+フード+アグリ」「果樹+植物」「流通+マーケティング+会計」とまとめたらどうか。 ○共創プラットフォームは、信州大学でもやっているが、一緒にやっていけるとよい。高大連携も可能（伊那谷アグリイノベーション推進機構）。

D	○人との関わりやディスカッションを通して、教科書では学べない内容を学習してほしい。 ○現在の学びでコミュニケーション能力を伸ばすことが出来ている。 ○伊那市内にて体験学習をしている。地元を新たに知る学習環境がある。 ○目指す学校像の中に、「専門性を学ぶ」という言葉を入れて欲しい。 ○専門性を持つことは良い。ベースになる自信や核になるものを持つことが良い。 ○否定的になるが、資料４は（上伊那総合技術新校再編実施計画懇話会の）原点に戻るべき。 ○15 歳～18 歳の高校生に、専門性を追求しても技術は身に付かない。高校時代に機械の操作方法やその工作物を知る程度で、後の事は社会に出てから習得する。高校生で専門性が低くても良い。必要なのは、能動的にやる、自主的にやること。人に言われてやるのではなく、そのような教育環境を実現してほしい。 ○例えば、建築業を想定すると、ある人はデザイン、ある人は水回り工事、ある人は電気（キ強電、弱電）、ある人は見積もる人、ある人は算数好きな人、ある人は算数嫌いな人、と多種多様な人たちで構成されている。そのような学校であってよい。 ○この懇話会では一貫して「新校の高校生は頭でっかちになってほしくない」と言ってきました。たしかに、ものづくりには手先が器用な生徒が欲しいが、いろいろなものを吸収できる生徒に高校生活を通して成長できることが重要。 ○伊那だけでなく上伊那全体の地域の学びをできたら楽しいと思う。 ○ディスカッション形式での授業があり自分で考える力がつくようなものがほしい。 ○学び方を学べる学校がいい。 ○専門性や技術を学べるものにして、そこの重点を置く。 ○能動的に動ける人が育つ環境にして欲しい。 ○中学生だと「なんとなく」や「学力的に行ける高校がここ」といった特に目的が無く入学してしまう人がいて、そのような人たちもやりたいと思えるような学校がいい。 ○理想的な意見もあったが、16 歳～18 歳の高校生が普通授業＋専門授業（それ以外の専門）＋部活が出来るのか。 ○専門性（技術力）も、さわりで良い。その後は社会で育てる。社会の技術力は、学校よりかなり高い。卒業後はわれらで育てる（教える）。 ○学校に於いては、民間の民間の技術者による授業を取り入れたら良いのでは。 ○総合技術高校と総合学科高校との「ちがい」をもっと明確とすべき。 ○専門性の視点から全体を組みたてる。 ○資料４の案で提示いただき、おぼろげだった学校像のフレームが見えてきた気がする。 ○現在の上伊那農業高校の８コース制がモデルになるのではないか。これらに工業・商業のコースが加わり、各々の専門とその融合を目指す体制を期待する。いかにミックスさせるかが、先生方の腕の見せどころではないか。 ○目指す学校像（上から３つ目）「○専門性を磨くとともに学科の枠を越えた・・・」、専門性を身に付けることがたいせつではないか。 ○社会に出たときに吸収できる人の育成。 ○伊那新校、赤穂総合学科とちがう学び、つきぬけるもの必要。 ○自分の未来が見える、つなげられる学校になってほしい。 ○科が２つに別れているのは、あまりよくない。 ○素々案の・・・・一言で表すキャッチフレーズとあるが、必要ないのかなと思う。 ○地域ものづくり科、地域デザイン科、何をしたいかわからない。 ○ここまでやると、つめ込みすぎかも。学校像のイメージなのでもっとシンプルがよい。 ○上伊那の資源を学ぶことで、上伊那を学ぶ時間の充実を。 ○専門性を生かす。そのうえでの連携を。 ○ミックスホームルームで他人の専門性を理解することができる。

資料３

「上伊那総合技術新校（仮称）再編実施計画懇話会」のスケジュール

令和５年６月 19 日　高校再編推進室

年度	月・日	懇話会 校地検討会議	内　容（〇懇話会、・校地検討会議）
令和３年度（２０２１年）	12 月 14 日	第１回懇話会	〇「県教委より説明」 ・懇話会趣旨　・新校のイメージ
	２月４日	第２回懇話会	〇生徒による各校の紹介・学びについて ※　コロナウイルスの蔓延につき延期
	２月 22 日	第２回懇話会	〇校地検討部会設置　承認 〇総合技術高校についての研修
令和４年度（２０２２年度）	４月 25 日	第３回懇話会	〇生徒による各校の紹介・学びについて
	６月 26 日	第４回懇話会	〇有識者による講演（産業教育について） ・鳴門教育大学教授　藤村　裕一先生
	８月 22 日	第５回懇話会	〇アンケート調査（素案）について ・高校生、中学生、保護者、産業界対象
	９月 20 日	第６回懇話会	〇アンケート調査について
	11 月 29 日	第７回懇話会 第１回校地検討会議	〇アンケート調査の結果について 〇学校像についての意見交換 ・校地選定に係る基本的な考え方について
	12 月 20 日	第２回校地検討会議	・基本データ（資料集）について
	１月 24 日	第８回懇話会 校地見学会	〇学校像のイメージ（たたき台）の意見交換 ・上伊那農業高校、駒ケ根工業高校の校地見学
	２月 24 日	第９回懇話会	〇学校像のイメージ（たたき台）の意見交換
	３月 24 日	第３回校地検討会議	・校地見学の報告と今後の進め方について
令和５年度（２０２３年度）以降	5月2日	第 10 回懇話会 第４回校地検討会議	〇学校像のイメージに関する意見交換 ・今後のスケジュールについて
	5月 30 日	第 11 回懇話会	〇学校像のイメージ（素案）の意見交換
	6月 19 日	第 12 回懇話会 第５回校地検討会議	〇学校像のイメージ（案）について ・今後の進め方について
	これ以降予定		
	8月	第 13 回懇話会	〇校地検討会議からの報告について　校地検討会議
	9月	第 14 回懇話会	〇再編実施基本計画策定に向けた総括
	県教育委員会定例会で「再編実施基本計画」決定		
	11 月～	県議会で同意	
	新校開校まで随時（年３～４回程度）開催予定		
	新校開校		

資料４

小諸新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

小諸商業高等学校、小諸高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和８年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であること、施設の整備期間等を考慮し、令和８年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

小諸商業高等学校

通学の利便性と、小諸市が進めている「多極ネットワーク型コンパクトシティ」のまちづくり構想と連動した新たな高校づくりの観点から、小諸商業高校を新校の校地校舎として活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　普通科３学級、商業科３学級、音楽科１学級

定時制課程　商業科１学級

※学科の名称等は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

普通科・音楽科・商業科を置く新しいタイプの普通科・専門学科併設校とする。

佐久地域の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には７学級程度が想定される。

東信地域全体の配置状況を考慮し、定時制課程を設置する。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

５　統合新校の学びのイメージ

別紙のとおり

両校が築いてきたこれまでの学びを通し、「地域を舞台に多様性を重視しグローカルな視点で未来を創造する３科融合校」を構想する。

６　統合新校の施設整備について

新校の学びに必要な施設整備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図っていく。

・施設整備に係る概ねの期間　４年程度を想定

資料４

小諸新校の学校像

《地域を舞台に多様性を重視しグローカルな視点で未来を創造する　３科融合校》

【基本理念】

実践的な学びを通して本物に触れ、年齢や立場を越えた様々な人たちや多様な進路を志すもの同士が協働して学ぶことで、新たな社会や価値観を創造する人を育む。

【教育方針】

（１）地域をフィールドとした協働的・探究的な学びを通して、地域の発展に貢献できる「課題発見力」や「探究力」を育む。

（２）グローバルな視野で、コミュニケーション力や多様な観点から批判的に考察する力を育む。

（３）主体的な学びを通して、自らの可能性と未来を切り拓く力や、より大きな夢に挑戦する力を育む。

【新校で重視する学びの姿勢】

主体的により良い社会の実現を目指す姿勢 ✖ 何をどのように学ぶのか探究する姿勢

《新校の学びの柱》

地域と連携した学び	学科・教科横断型の学び	本物に触れる学び

〇多様性を大切にする学び
〇ワクワクする学び
〇小諸ならではの学び

→ **小諸共学共創コンソーシアム**
地域の人々と共に学び
地域の未来を共創

商業科　**普通科**　**音楽科**

学科・教科横断型の授業を展開、実社会をフィールドとした３科のハーモニー

商業科	普通科	音楽科
〇商業の専門性を伸長し、地域を舞台にした実践的な学びを通して、未来を拓くイノベーションの担い手の育成を目指す	〇協働的に地域課題を探究する学びを通して、多様な進路への可能性を追求し、高いレベルでの自己実現を目指す	〇音楽の専門的な学びに加え、他科と融合した諸活動を通して、世界を舞台に、それぞれの夢を実現する力を養成する

主体的・協働的に生き方や学ぶ意義を考える、新校独自の探究的プログラム

◆小諸商業高校の定時制商業科の学びは新校に継承

資料５

伊那新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

伊那北高等学校、伊那弥生ケ丘高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和 10 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であること、施設の整備期間等を考慮し、令和 10 年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

伊那北高等学校

日常行われる教育活動の充実につながる校舎と一体となっている敷地（校地）の広さを考慮し、伊那北高校を新校の校地校舎として活用する。

併せて、伊那弥生ケ丘高校の第２グラウンドも有効に活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　普通科６学級、特色学科２学級

※学科の名称等は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

普通科と特色学科を設置し、新たな学びに対応したシステムを導入する。

上伊那地域の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には８学級程度が想定される。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

５　統合新校の学びのイメージ

別紙のとおり

地域と大学、研究機関等との協働した探究を核とし、個別最適な学びを実現する、「自らの可能性を切り拓き、夢の実現に果敢に挑戦する高校」を構想する。

６　統合新校の施設整備について

新校の学びに必要な施設整備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図っていく。

・施設整備に係る概ねの期間　６年程度を想定

資料５

伊那新校の学校像

自らの可能性を切り拓き、夢の実現に果敢に挑戦する高校

目指す学校像

○「探究」を核とした学びを通して、自己実現と社会貢献を目指す

○他者との協働を通して、多様な価値観を共有し人間性を育む

○自主的な活動や創造的な活動を通して、主体性を育む

新たな学びに対応したシステム

「探究」をベースにした教育活動

個別最適な学びを実現する“単位制”

文理融合した学び・教科横断型授業の展開

大学・研究機関・企業・自治体などと協働した学び

１年次：必履修科目を中心に履修

２・３年次：自分の学びを自分でデザインし、履修する科目を選択

普通科

探究を核として持続的な学びを実現する学科

■地域課題を基に日本、世界に目を向け、これからの社会の核となる人の育成を目指す

◇地元自治体など、コンソーシアムとの連携による、ローカルな視点とグローバルな視点で行う探究活動

◇自らの興味関心や進路希望に応じて選択ができる多様な科目の設置

特色学科

高度な探究により、卓越した学びを実現する学科

■学問的真理を追究する意欲、社会の課題解決への挑戦心や使命感を持つ人の育成を目指す

◇大学・研究機関をはじめ、コンソーシアムとの連携による、応用的・発展的な探究活動

◇課題研究や先進的な探究を行う科目、高度な内容を扱う科目などの設置

連携・協働

上伊那共学共創コンソーシアム

多様な人々と学び合い、地域課題の解決や地域の活性化・イノベーションの創出を目指すコミュニティ

医療機関

大学

企業

自治体

国際機関

上伊那広域連合

等

資料６

佐久新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

野沢北高等学校、野沢南高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和 11 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であること、施設の整備期間等を考慮し、令和 11 年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

野沢北高等学校

「新校で構想する学び」の実現を第一に考え、敷地（校地）の広さと周辺の道路環境を考慮し、野沢北高校を新校の校地校舎として活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　学際領域に関する学科　８学級程度

定時制課程　普通科１学級

※学科の名称は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

設置学科については、高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化（高等学校設置基準及び高等学校学習指導要領の一部改正）により設置可能となった「新たな普通科」の１つである、学際領域に関する学科[注]を設置し、新たな学びに対応した単位制を導入する。

佐久地域の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には８学級程度が想定される。

東信地域全体の配置状況を考慮し、定時制課程を設置する。

注）現代的な諸課題のうち、SDGs の実現や Society5.0 の到来に伴う諸課題に対応するために、学際的・複合的な学問分野や新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科。（学際＝研究などが異なる分野にまたがって関わること）

５　学びのイメージ

別紙のとおり

地域と大学、研究機関等と協働した探究を核とし、「夢のある未来社会を地域と共創する知の探究校」を構想する。

６　施設整備

新校の学びに必要な施設整備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図っていく。

・施設整備に要する期間　６年程度を想定

資料６

夢のある未来社会を地域と共創する「知」の探究校

目指す学校像

○ 高い志の進路を実現し、地域・日本・世界に貢献する人を育む
○ 新時代を切り拓く「創造力」と「探究心」を育む
○ 他者との協働により、多様な価値観を共有し、豊かな人間性を育む

学際領域に関する学科

確かな学力と教養を獲得する単位制

■ 文理融合のリベラルアーツ的な学び
■ 探究を核とした学び
■ 大学・研究機関・企業・自治体などと協働した学び

１年次：必履修科目や多彩な校外学習等により探究の基礎・基本を習得

２～３年次：単位制の自由度を最大限活用して「自らの学びをデザイン」

理数科学選択群　　**人文科学選択群**

◇ 選択群を中心に、個々の興味関心により主体的に科目選択
◇ 学校内外の自主的・創造的な活動による単位取得
　海外留学、資格取得、大学の講義を受講、地元企業との共同研究　など
◇ 多様な地域資源を活用したグローカルな探究活動
◇ 生徒の活動に伴走するアカデミックサポーター（ＯＢ・ＯＧ）との連携
☆ 医学部・デジタル系の大学や海外の大学への進学など、生徒が希望する多様な進路実現を目指す

佐久エリア共学共創コンソーシアム
多様な人々と協働し、地域の未来社会を共創するコミュニティ

大学

医療機関

地元企業

自治体

研究機関

◆定時制課程　普通科（単位制）：３年間での卒業や全日制の授業を履修可能とする新システム◆

資料７

赤穂総合学科新校（仮称）再編実施基本計画

１　対象校

赤穂高等学校

２　募集開始（開校）予定年度

令和 11 年度

上伊那地域の高校の再編が進む中、より魅力的なカリキュラムをできるだけ早期に提供するため、施設の整備期間等を考慮し、令和 11 年度を新校の募集開始予定年度とする。

３　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　総合学科５～７学級程度

定時制課程　普通科１学級

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

第３通学区唯一の総合学科を設置する。自己の適性、社会とのつながりを意識したキャリア教育を実践し、多様な学びが可能な系列横断型のカリキュラムを通して、自主的に進路希望の実現を図ることが考えられる。

上伊那地域の中学校卒業予定者数の推移や高校の再編進行状況から、新校の開校年度には５～７学級程度が想定される。

赤穂高等学校の定時制普通科は新校に継承する。

４　学びのイメージ

別添のとおり

幅広い系列の設定により多様な個性が伸長し、地域との連携による実践的な学びにより、国際社会と未来を見据えた人材が育つ「地域とともに未来をひらく学びの拠点」を構想する。

５　施設設備

新校の学びに必要な施設整備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図ってゆく。

・施設整備に要する期間　６年程度を想定

資料７

赤穂総合学科新校の学校像

地域とともに未来をひらく学びの拠点

目指す学校像

- ○ 地域に根差し、開かれ、ともに歩む学びの場
- ○ 自由闊達、文武両道の伝統が息づき多様な個性が伸長する学びの場
- ○ 国際社会と将来を見据え、未来の可能性を追究する学びの場

育成する生徒像

- ○ 地域理解を通じて地域貢献を実践する、思いやりのある人物
- ○ 自主性をはぐくみ、主体的に行動し、発信できる人物
- ○ 新しい時代を担う、国際感覚とコミュニケーション力を持つ人物

多様な進路や学びの希望に応える系列の設置

- ○ 多彩で魅力ある講座を設置
- ○ 単位制によるフレキシブルな学び
- ○ 教科や専門科目の枠を超えた横断的な学び

×

地域と連携した探究的な学び

- ○ウミガメプロジェクト※を核とした地域理解
- ○企業等と協働し課題解決を目指す学び
- ○ 地元公民館との連携（出前講座）

※駒ヶ根市との連携－将来の地域を支える人材育成と魅力ある高校づくりの推進

地域に愛され、共に歩む高校

キャリアデザイン

- ○ 「産業社会と人間」を通した自己の生き方・職業観の追究
- ○ 地域をフィールドに多くの人達と協働する「探究学習」
- ○ 多彩な設置科目から自主的に学びをデザイン

学び続けることが可能な環境づくり

生徒の希望に応えるカリキュラム

- ■ 人文社会・自然科学　（文理を超えた広角的な視野の学び）
- ■ グローバルコミュニケーション　（異文化理解・国際貢献）
- ■ ヒューマンコミュニケーション　（持続可能な社会の実現）
- ■ ビジネスコミュニケーション　（起業・産業構造の変革）
- ■ メディアコミュニケーション　（未来のメディアを創作）

・多様な科目を設置し、希望進路を実現
・上級学校（県看護大・信大農学部・工科短大等）、関係機関（JICA等）や産業界と連携した専門的・実践的な学び
・幼保小中高大の連携による学びの継続
・支援が厚く、生徒の更なる学びの意欲を高揚

学びを支える共学共創コンソーシアム

■ 赤穂高等学校の定時制普通科は新校に継承

資料８

須坂新校（仮称）再編実施基本計画

１　再編統合対象校

須坂東高等学校、須坂創成高等学校

２　募集開始（開校）年度

令和 11 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であることと、施設の整備期間等を考慮し、令和 11 年度を新校の募集開始年度とする。

３　活用する校地・校舎

須坂創成高等学校

「新校で構想する学び」の実現を第一に考え、専門科と新たな普通科（仮称：みらいデザイン科）の連携を実現していくために、須坂創成高等学校の施設・設備を活用する。

部活動など生徒の自主的活動のため、引き続き旧須坂商業高等学校のグラウンドや体育館等の施設を活用する。

４　設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程　農業科・工業科・商業科・みらいデザイン科（仮称）

４学科あわせて７学級程度を想定

※学科の名称は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

みらいデザイン科（仮称）は、高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化（高等学校設置基準及び高等学校学習指導要領の一部改正）により設置可能となった「新たな普通科」の１つである、地域社会に関する学科[注]として設置する。また単位制を導入し、他学科の授業も選択できる、個別最適な学びにふさわしい教育課程を編成する。

北信地域の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には７学級程度が想定される。

注）現代的な諸課題のうち、高等学校が立地する地元自治体を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し、地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科。

５　学びのイメージ

別紙のとおり

地域をフィールドとした探究を学びの中心に据え、「実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校」を構想する。

６　施設整備

新校の学びに必要な施設及び、地域連携の実現のため必要な機能の整備を図る。

・施設整備に要する期間　６年程度を想定

学びのイメージ

資料８

実社会の課題と向き合い、地域を学びの場に成長し続ける高校

育てたい生徒像

- ○ 探究的な学びにより身に付けた力で自分の未来を積極的にデザインできる生徒
- ○ 他者や社会と主体的に協働できる、コミュニケーション力を持った生徒
- ○ 多様な他者とつながり、新しい価値を生み出し、よりよい社会実現のために学び続ける生徒

目指す学校像

- ○ 地域をフィールドとした探究的な学びをとおして、課題発見解決能力を育む
- ○ 学科や学年を超えた協働的な学びをとおして、キャリアデザイン力を育む
- ○ 地域とともに学び、主体的に地域の未来を創造する力を育む

地域の未来を、地域の方々と共に創る

コミュニティデザインハイスクール

農業科 ― 工業科 ― 商業科 ― みらいデザイン科（仮称）
※新たな普通科

４学科の連携で地域の未来づくりに参画

専門科の学びで得た農業・工業・商業・デジタルなどの視点

みらいデザイン科の探究活動で得た芸術・歴史・福祉・国際などの視点

学びの柱

- ◆ 実体験をとおして、自分と地域の未来を創造する学びを展開
- ◆ 各科の学びの成果をもとに協働的な探究を実施
- ◆ 情報リテラシーを徹底して学習し、いつでも、どこでも、ICT を積極的に利活用

具体的な取組

- ○ 校外学習、校外活動の単位認定（ボランティア、大学の講義、海外留学など）
- ○ 全学科でのデュアルシステム（校外での実践的な学び）
- ○ 世代を超えた交流学習（中学校との合同探究発表会、地域への公開講座など）
- ○ 生徒自らが学校を創造していく自主的活動（生徒会活動と部活動）
- ○ 探究の学びを深化させる「地域連携コーディネーター」が校内に常駐
- ○ 地域との協働による生涯学習の拠点づくり

単位制
学科の枠を超え、他科の専門科目も履修して自身の学びを深化
学校を飛び出してのアクティブな探究活動を学びの中心に

連携
コミュニティデザインを研究する国内外の大学との連携
地域を学ぶ国内外の高校生と交流

地域の方々との共同研究

新校が生涯学習の拠点

須高地域共学共創コンソーシアム

大学・専門学校

医療・福祉機関

地元企業・商工会

自治体

研究機関

資料９

上伊那総合技術新校の学校像のイメージ（素々案）

（農業・工業・商業を持つ上伊那総合技術新校を一言で表すキャッチフレーズ）

育てる生徒像

○専門性・社会性や人間力を育み、地域や自分自身のみらいをデザインできるひと
○多様な人々との協働を通して、主体的に行動し、学び続けることができるひと
○幅広い視野や、多様な価値観を持ち、学びを活かして社会に貢献できるひと
○上伊那で学び、地域・社会を元気にすることができるひと

目指す学校像

○生徒が学んだことを活かし、自分自身の将来と地域・社会のみらいを創造できる学校
○上伊那の資源を学びや体験に活かし、協働的な学び、個別最適な学びを通して生徒が成長できる学校
○学科の枠を越えた農・工・商の連携により新たな価値観を創出し、地域・社会に貢献できる学校
○多様な生徒が「いきいき」と生活し、個人や社会の「しあわせ」を実現できる学校

育つ力

◆実習経験を通して、実践的な確かな技術力
◆自主的に課題を発見し、解決策を考える想像力やアイディアを出す力
◆チーム開発に積極的に取り組むことができるコミュニケーション能力
◆社会的な課題に関心を持ち、持続可能な社会を創るための技術を追求する意欲力

工　業 × 商　業 × 農　業

農業・工業・商業の学びを活用・融合させた課題研究

地域ものづくり科（仮称）	地域デザイン科（仮称）
主に工業的な学びを通して、地域創生、地域貢献を果たす。 （学科・コースの例） 機械、電気、情報技術…	主に農業的、商業的な学びを通して、地域創生、地域貢献を果たす。 （学科・コースの例） 野菜、果樹、植物、動物、フード、アグリ、里山、グローカル、マーケティング、流通、会計、まちづくり探究…

学びのプラットフォーム（各科・コースの授業に加えた自由な科目履修）

興味・関心によって、他学科・コースの授業を選択し、専門性を深め、幅を広げる。
○地域で育てたい人材につながる科目（土木、建築、国際交流、繊維、観光等）
○進路（進学、就職）に関する科目　など

学びを支えるシステム

◆ミックスホームルーム　◆デュアルシステム　◆模擬会社の運営
◆幼保小中大や養護学校との交流　◆学校外の学修の単位互換を含む、新たな単位認定

上伊那地域共学共創プラットフォーム

地域連携コーディネータの設置

上伊那広域連合・自治体 | 大学等 | 企業・産業界 | 国際機関 | 特別支援学校

資料10

上伊那総合技術新校の学校像のイメージ（案）

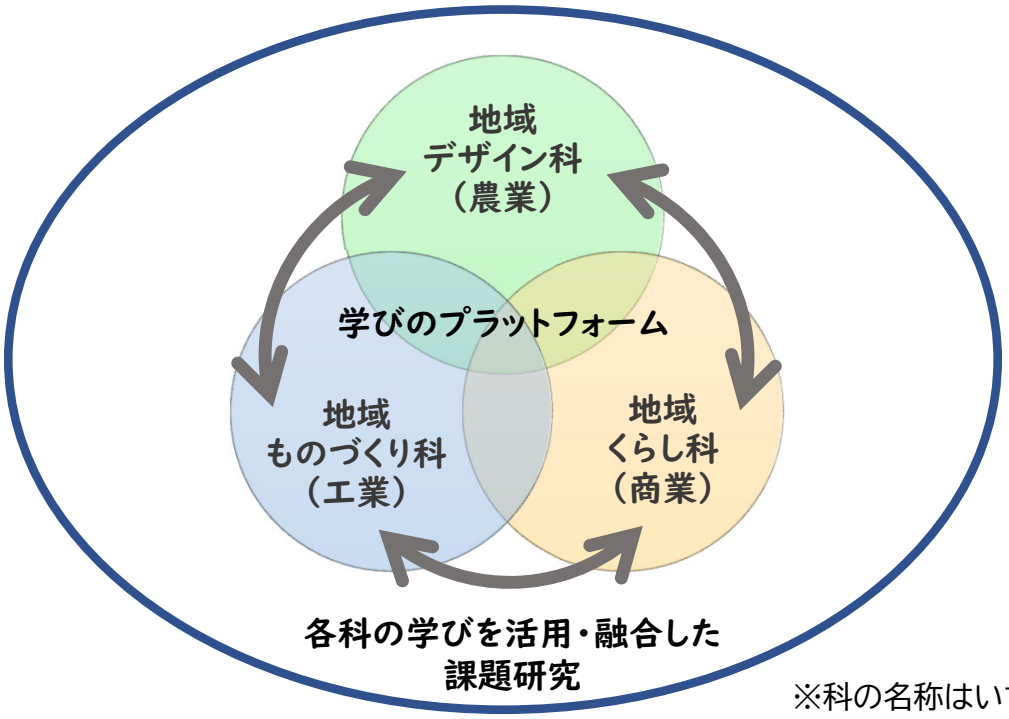
（農業・工業・商業を持つ上伊那総合技術新校を一言で表すキャッチフレーズ）

育てる生徒像

○上伊那で学び、地域・社会を元気にすることができるひと
○専門性・社会性や人間力を育み、地域や自分自身のみらいをデザインできるひと
○多様な人々との協働を通して、主体的に行動し、学び続けることができるひと
○幅広い視野や、多様な価値観を持ち、学びを活かして社会に貢献できるひと

目指す学校像

○専門性を磨くとともに、学科の枠を越えた農・工・商の連携により新たな価値観を創出し、地域・社会に貢献できる学校
○多様な生徒が「いきいき」と生活し、個人や社会の「ウェルビーイング」を実現できる学校
○生徒が学んだことを活かし、自分自身の将来と地域・社会のみらいを創造できる学校
○上伊那の資源を学びや体験に活かし、協働的な学び、個別最適な学びを通して生徒が成長できる学校



※科の名称はいずれも仮称

学びを深化させるシステム

◆ミックスホームルーム　◆学校外の学修の単位互換を含む新たな単位認定
◆幼保小中大や特別支援学校との交流　◆デュアルシステム　◆模擬会社の運営

地域との連携・協働

上伊那地域共学共創プラットフォーム

地域連携コーディネータの設置　リスキリング・リカレント教育の展開

上伊那広域連合・自治体　大学等　企業・産業界　国際機関　特別支援学校